

八瀬や大原

八瀬や大原とは、比叡山の西側の麓・高野川の沿岸地域をいう。

https://www.kyotonikanpai.com/area/05_06_ohara_yase_hieizan.shtml

A、八瀬

http://www.jrtours.co.jp/kyoto_plan/walk/201106.html



八瀬天満宮

菅原道真を祀る神社。境内には9つの摂社が祀られています。神社としての創祀は不明ですが、672年の「壬申の乱」で、背中に矢疵を負った大海人皇子が、八瀬の里でその傷を癒したという伝承から、江戸時代まで「矢背（やせ）天満宮」とも呼ばれていたのだとか。

かま風呂旧跡

背中に矢疵を負った大海人皇子が窯風呂で傷を癒したという伝承が残る八瀬。窯風呂は日本古式のサウナの一種で、当時は薪などを焚いて温めた巨大なかまぐら型のかまどに、濡れた敷物などを持ち込むなどして蒸気浴をしたのだとか。そして、そんな窯風呂を今に伝えるのが、温泉旅館「ふるさと」の敷地内にあるかまぶろ旧跡です。明治28年に復元作製された2基のうちの1基であるとされ、京都市指定・登録文化財に登録されています。宿には岩風呂のほかに、現代版の窯風呂もあり、当時の気分を味わいながら汗を流すことができます。

八瀬平八茶屋

1964年、八瀬遊園地の開業に合わせ開店した和食店。食事処の少ない八瀬にあって、高野川を眺めながらゆったりと食事ができる貴重なお店で、紅葉の季節にはひととき賑わいます。料理は手軽なとろろ御膳1500円から鮎やイワナを使った本格的な川魚生懷石5000円〜まで用意され、シーンにあわせて楽しめます。また、2日前までに予約をすれば、八瀬名物の窯風呂に入浴することも可能。古式にのっとり薪焚きの窯風呂に入れるのは八瀬でもここだけとなります。

B、大原

<http://www.webtown-kyoto.com/ohhara.html>



寂光院

建礼門院ゆかりの尼寺。静寂な境内は遠く平家物語の時代を彷彿とさせます

聖徳太子が推古2年（594）に用明天皇の菩提を弔うために創建されたものですが、平家物語の悲劇のヒロイン、建礼門院（平徳子）が余生を送ったところとしても有名な尼寺です。壇の浦の合戦で平家はことごとく滅び、建礼門院は幼い安徳天皇を抱いて入水しましたが、一人源氏に助けられます。その後、都に戻った建礼門院は寂光院の傍らに庵を結び、わが子・安徳天皇と平家一門の冥福をひたすら祈ったといわれています。そんな建礼門院を哀れんで後白河法皇がここを訪れたといわれていますが、それが有名な「大原御幸（おおはらごこう）」です。

宝泉院

柱と柱の間の空間を額縁に見立てる額縁の庭で有名です。この庭は11月20日の午後4時頃が一番美しく見えるそうです。

宝泉院は[勝林院](#)の塔頭（高僧の死後、弟子が師を慕って近くに立てた寺）といわれており、平安時代末期に創建されました。[実光院](#)とともに声明の寺として有名です。

書院は文亀2年（1502）の再建で、書院北側にある茶室の竹風庵は逆勝手（通常とは逆の茶室の配置の仕方）で、鴻池別邸の茶室を移築したものとされています。

声明を聞かせてもらえることができ、声明の音律を調べる石盤という貴重な古楽器も展示されています。

庭園には樹齢500余年の五葉松があり、書院より庭を眺めた時の紅葉と竹林の景色は格別なものといわれています。

また、抹茶を点ててくださるサービスがあり、書院より庭を眺めながらいただくお茶は格別なものです。

勝林院

「大原問答」で有名です。正論を唱えると手から光を放ったと言われる「証拠の阿弥陀」こと、阿弥陀如来像が安置されています。

[慈覚大師](#)が開基ですが、長和2年（1013）に寂源法師によって建立されました。文治2年（1186）に浄土宗の宗祖・法然と旧仏教の碩学と宗論を戦わせた「大原問答」はあまりにも有名です。

日本音楽の源流といわれる声明音律の発祥の地と呼ばれ、[来迎院](#)と並んで大原二流の一流をなしています。

すぐ近くに、勝林院にゆかりのある[宝泉院](#)があります。

境内には鐘楼と本堂があり、その呼び名は証拠阿弥陀堂といわれ、旧本尊は寛仁4年（1020）の「大原談義」から150年余り後の「大原問答」で説法の証を示したことから「証拠の阿弥陀」と呼ばれています。また、大原問答をしのばせる問答台や法然腰掛石もあります。

◇声明（しょうみょう）◇

寺院で行われる儀式のなかで僧侶によって唄われる音楽です。経典に旋律をつけて合唱し、仏を賛仰する、キリスト教の教会音楽に匹敵する宗教音楽です。また声明は、平曲や謡曲などの日本音楽に大きな影響を与え日本の音楽の源流であるといわれています。

本堂内ではボタンを押すと声明が自由に聞けるようになっており、本堂に響きわたる歌声を聞いていると、しばし時を忘れ、幻想的な気分に入ることができます。

実行院

半年間も咲き続けるという不断桜と、美しい庭園が見どころです。

[勝林院](#)の僧院で、同じような子院として、[宝泉院](#)、普賢院、理覚院などがありましたが、大正8年に普賢院、理覚院を併合し実光院となりました。

この地は天台声明（てんだいしょうみょう。仏前で、節をつけて仏徳をたたえる声楽。讚美歌のようなもの）の中心地で、代々天台声明の研鑽に励んでこられました。

客殿の欄間の三十六詩仙画像は江戸時代中期の狩野派の画家の筆。また、声明に使用する楽器なども陳列されています。

庭園は、東側が池泉観賞式（枯山水と対峙する庭園の作り方で、歩いて観賞せずに院に座ったまま眺める形式のこと）の庭園で、江戸時代後期の作庭です。律川から導いた滝の水が流れ落ち、池の手前を俗世間、向こう側を仏の浄土に見立てて作られています。

西側一体は旧理覚院の庭園でした。こちらは回遊式の庭園で、荒廃していたものを現在のご住職が作庭されたものです。西の金毘羅山や小塩山を借景に取り入れ、東の庭とは違った趣です。

庭には桜でありながら、11月頃に満開になり、春にもまた咲くという不断桜がしっかりと根を下ろしています。紅葉との対比が「いとをかし」ですね。拝観するには表の鐘をならし、少し待つと案内の方が出てこられます。混み合う秋以外は比較的閑静なお寺なので、一人静かにたたずみたい方にはお勧めです。お茶とお菓子をいただいて侘にひたりましょう。

三千院

「京都大原三千院」という歌であまりにも有名ですが、見るべきものも沢山あります。井上靖をもって「東洋の宝石箱」といわしめた瑠璃光庭をぜひ鑑賞して下さい。

延暦7年(788)伝教大師最澄が叡山東塔の梨の大樹の下に一字を建てたのが起こりという門跡寺院です。貞観2年(860)清和天皇の命により、滋賀の坂本梶井に移し、その後梶井御殿、梨本門跡と呼ばれ、応仁の乱後、現在の地に移りました。

優美な極楽の寺として有名で、背に小野山を負い、呂川と律川に挟まれた静寂の地にたたずんでいます。周囲は城を思わせるような重厚な石垣がめぐらされ門跡寺院らしい風格をかもしています。妙法院・青蓮院とともに天台宗三門跡の一つであり、自然の地形を巧みに利用した境内には、豊臣秀吉の建立と伝えられている客殿や宸殿が建ち、有清園・

聚碧園と呼ばれる二つの美しい庭園があります。桜、あじさい苑、紅葉の美しさ、雪景色のすばらしさと三千院は季節ごとの叙情をかきたててくれます。

来迎院

天台声明（しょうみょう：節をつけて唱えるお経）の道場として建立されましたがその後、良忍が再興しました。その昔の仏教音楽が聞こえてくるようです
日本音楽の源流といわれる声明（しょうみょう）の発祥地で、日本天台宗を開宗した最澄の直弟子・慈覚大師円仁が声明の修練道場として開山されたものです。一時期衰退しましたが、平安時代末、融通念仏（一人の念仏と衆人の念仏とが互いに融通しあって往生の機縁となること）の開祖・聖応大師良忍は、円仁が伝えた声明を統一し魚山流声明を集大成しました。この魚山流はその後天台声明の主流となり、良忍上人以後、来迎院からは湛智・宗快・喜淵などの声明評論家を輩出し声明の本山としての血脈を守り続けました。
また、来迎院の北に位置する勝林院も声明音律で有名です。

本尊の薬師、阿弥陀、釈迦の三如来像（重要文化財）は、藤原時代の木像漆箔寄木造で、円満な相好とやわらかい曲線により、優雅な美を構成しています。

◇修正会◇

1月2日に行われる行事で、三十三度法要とも呼ばれ無病息災を祈る一風変わった法要です。ササラと棒を持って「33度」と声を上げ、飛んだり跳ねたりします。

境内には本堂・書院・弁天堂が建ち、汀（みぎわ）の池・汀の桜・翠黛山など平家物語にちなんだものが多く、寂光院門前のそばには建礼門院の庵跡や、建礼門院がおぼろ月夜に姿を映したといわれている朧の清水などもあります。

平成12年、火災によって本堂や本尊（重要文化財）が損傷し、現在の本堂および本尊は平成17年に復元されたものです。

C、大原女（おおはらめ）と小原女（おはらめ）

大原（おおはら）や八瀬（やせ）の里から、しば・薪・花などを頭にのせて、京都の町に売りに行く女性の事です。

筒袖に帯を前で結び、脚絆（きゃはん）にわらじばきといういでたちで、荷を頭に乘せて京の町へ薪などの物売りに来る姿は、平安時代以降、都の風物として名高い。現在は、薪の時代ではなくなったので、普段、その姿を見ることはなくなったが、[大原女祭り](#)は行われているし、[現地では仮装姿で写真を撮る女性が多い](#)。

京都、八瀬の奇祭「八瀬赦免地踊」

<https://www.youtube.com/watch?v=ngTs2XAHBsI>

公式ホームページ：<http://shamenchi.net/>

1.由来

八瀬の里は、京都の市街地から北東部に位置し、比叡山の麓で古くは日本海(小浜)から京の都へ魚などが運ばれた「鯖街道」が通る山間の小さな里です。

八瀬の村は昔から、皇室との関係が深く、後白河院の頃から八瀬童子は度々お供を勤め特に延元元年、後醍醐天皇が叡山に御潜幸の折には駕輿丁を承り、弓矢を持って道中を御固め申し、無事に延暦寺までお供申し上げました。

こうしたことがあって建武三年二月二十四日に八瀬の村人一同に対し、「年貢以下諸課役」など一切免除の御綸旨を戴き、その後、歴代の朝廷から同様の御綸旨を賜ってまいりました。

寶永四年に比叡山「延暦寺」との結界に関して訴訟問題が起こり村人は御代々の御綸旨を奉載して幕府に上訴したところ、時の老中「秋元但馬守」は八瀬村に有利な裁定を下された。これは、単に一小村の訴訟沙汰としては、余りにも大きな出来事でありました。

村人は高恩報謝として、氏神天満宮の側に御綸旨宮を建て秋元神社として奉り毎年十月十一日（現在 体育の日の前日の日曜日）に「赦免地踊り」を奉納しています。

2.お祭りの見どころ

祭りは夜19時ごろからにおこなわれます。

祭りの中心は「切子灯籠」で、灯籠踊りともいわれ室町時代の風流踊りの面影を残しています。

切子灯籠は高さ約70センチで赤い紙に「透かし彫り」（武者絵や動物、風景などの絵模様）を白の地紙に張ったもので毎年各町ごとに一対製作します。

赦免地踊りは次の人々によって奉納されます。

十人頭　－　その年満30歳になる青年十人で、祭り一切を取り仕切ります。

灯籠着　－　8名、女装した男子（13～14歳）

- 警 護 — 8名、灯籠着の補助役
踊り子 — 10名女子児童(10～11歳)
音頭取り衆— 6～7名 太鼓うち — 1名
新発意 — 各町よりでて狂言等を行う

祭りは十人頭の合図(午後7時)により始まります。

各町の宿元(長老宅)に新家(十人頭が一番年少者)が祭りの始まりを告げると、頭の灯籠を載せた灯籠着と警護が音頭取り衆などとともに伊勢音頭に合わせ、門口(村の中心地)に向かいます。

門口では各町の灯籠、踊り子、音頭取り衆、新発意が頭(十人頭が一番年長者)によって揃っているかどうか確認されます。

全員の揃っていることの確認後、十人頭を先導で宮へと進みます。

馬場では、宮に向かって進む行列が一行に並び踊り子たちの持つ赤い提灯と灯籠着のかぶる灯籠の蠟燭が「ゆら、ゆら」ゆれて幻想の明かりを見せます。

石段に着くと観衆のざわめきを十人頭が静めます。静寂のなか静かに「忍細道に山椒を植えて、行くとき一つ植えて」と静かに、静かに「道歌」が音頭取り衆に歌われ石段を一段一段上られて行きます。

屋形に着くと灯籠着はゆっくりと音頭に合わせてその周りをまわります。

舞台では三番叟が演じられるのに続いて踊り子たちによって手桶をもった「汐汲み踊り」や花籠をもった「花摘み踊り」、新発意たちによる狂言が奉納される。(昔は一晩中、芝居など演じられた)

やがて「狩場踊り」の音頭が歌われると、灯籠は「警護」にかぶられゆのつくりと屋形の周りをまわり始めます、三番の歌詞に入り、「いざや帰らんわが宿へ」と早いリズムで歌われ始めると灯籠も宿元へ走りながら帰っていき祭りは終わります。

音頭は楽譜がなく、すべて口承で伝えられます、リズムは太鼓で「四つ拍子」トントントーンと打たれます、曲数は全部で10曲あります、一年目で5曲習い2年目で5曲を習って一通り終わり、それから「ゆり」といった「いろあい」を何年もかけてつけていきます。

3.これまでの出演

歴代天皇陛下、京都御所御滞在中、お庭にて天覧に供す

昭和27年 文化財保護委員会により「無形文化財八瀬赦免地踊り」に選定される

昭和39年 オリンピック東京大会芸術展示「民俗芸能大会」出演

昭和45年 万国博覧会「民俗芸能大会」に選抜出演

昭和56年 京都市登録無形民族文化財に登録

昭和61年 第一回国民文化祭に出演

など多数。

4.場所

八瀬秋元神社 / 京都府京都市左京区八瀬秋元町
(雨天の場合は京都市立八瀬小学校体育館)

D、八瀬童子

大正元年、明治天皇の葬送にあたり、喪宮（もがりみや）から葬礼場まで棺を陸海空いずれの儀仗兵によって担がせるかをめぐって紛糾し、その調停案として八瀬童子を葱華輦（そうかれん）の輿丁（よてい）とする慣習が復活した。葱華輦（そうかれん）は天皇の棺を載せた輿のことであって、天皇が用いる屋上にネギ坊主（葱華）形の吉祥飾りを着けた特別の輿であることからその名がある。明治維新後には地租免除の特権は失われていたが、毎年地租相当額の恩賜金を支給することで旧例になった。この例は大正天皇の葬送にあたって踏襲された。

平成元年、昭和天皇の葬送では棺は自動車（轎車）によって運ばれることとなり、葱華輦（そうかれん）は式場内の移送にのみ用いられることとなった。八瀬童子会は旧例の通り八瀬童子に輿丁（よてい）を任せるよう宮内庁に要請したが警備上の理由から却下され、輿丁には50名の皇宮護衛官が古式の装束を着てあたった。八瀬童子会からは6名の代表者がオブザーバーとして付従した。

八瀬童子の要請が却下されたのは誠に残念なことである。天皇は日本国民の象徴であり、日本の伝統・文化を守らなければならない。八瀬童子は、日本古来の伝統・文化を色濃く伝承してきた部族の子孫であり、しかも少なくとも後醍醐天皇のとき以降天皇と密接な関係にあった人たちである。天皇は国民といろいろなインターフェースを持つべきであり、八瀬童子のような古代からの伝統・文化を継承している人たちとのインターフェースは大事にされなければならない。宮内庁の浅学ゆえにこのことが軽視されるのは許しがたいことである。

私は『[天皇と鬼と百姓と・・・「天皇のいやさか」を祈る](#)』という論文の第5章に「八瀬童子と天皇」という題で八瀬童子のことを書いた。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/ten05.pdf>